

ちりにたつわがなきよめむ百敷の人の心をまくらともがな

〔拾遺和歌集十八〕雑賀修理大夫惟正が家に、方たがへにまかりたりけるに、いだして侍ける枕にかき

つけ侍ける、

藤原義孝

つらからば人にかたらんしきたへの枕かはしてひと夜ねにきと

〔新後拾遺和歌集十六〕雑の御歌の中に

光嚴院御製

山里は明け行く鳥の聲もなし枕のみねにくもぞわかる、

〔枕草子春曙抄〕一題號を枕草紙といへる心は、略中此草紙の奥に云宮のおまへに、内のおとゝの

奉り給へりしを、是に何をか、まし、うへの御前には史記といふ文をなんか、せ給へるとのた

まはせしを、枕にこそはま侍らめと申しかは、さはえよとて給はせたりしを、あやしきを、こよや

何やどつきせずおほかるかみのかずを書つくさんとせしに、いと物おぼえぬことぞおほかる

やと云々、枕にこそし侍らめとて申うけたる物に、か、れたる草紙なれば、まくらさうしと申侍

るなるべし、

〔冠辭考三〕くさまくらたび

萬葉卷一に、草枕クサマクラ客爾キヤクニ之有者アリガ云々、こは卷五に、道乃ミチノ久麻尾クマビ爾ニ久佐クサ太袁タウ利志リシ婆ハ刀利ト志伎シキ提チてふこ

とく、草引結びて枕とする意にて、旅には冠カらするなり、此うた舒明天皇の御代を擧たるに、いひ

ないへる詞
なりけり、

〔玉勝間八〕枕詞

天又月日などいはむとて、まづひさかたのといひ、山といはむとて、まづあしびきのといふたぐ

ひの詞を、よに枕詞といふ、此名ふるくは聞も及ばず、中昔の末よりいふことなめり、是を枕とし

もいふは、かしらにおく故と、たれも思ふめれど、さにはあらず、枕はかしらにおく物にはあらず、